

J. デューイと倉橋惣三における幼稚園教育

佐久間 正 弘

A Study of Kindergarten Education
in J.Dewey and in Sozo Kurahashi

SAKUMA Masahiro

豊岡短期大学 論集

第 13 号 別 冊

平成 28 年 12 月 20 日 発 行

J. デューイと倉橋惣三における幼稚園教育

A Study of Kindergarten Education
in J.Dewey and in Sozo Kurahashi

佐久間 正 弘
SAKUMA Masahiro

はじめに

本稿では、幼稚園教育の原点ともいえるフレーベルおよびフレーベル主義の幼児教育を、デューイと倉橋がそれぞれどのように理解し、いかなる幼稚園教育をめざしたのかを検討する。

世界で初めての幼稚園は、1840年にドイツのプランケンブルクにフレーベル（Friedrich Fröbel）によって設立されたとされることは周知のとおりである。しかし、ドイツではフレーベル主義の幼稚園が無神論に向かって教育しているとされて、1851年プロセイン政府からフレーベルの原理にしたがう幼稚園の禁止令が出され、フレーベル主義の幼稚園がドイツで陽の目を見ることはなかった。ところが、フレーベル主義の幼稚園教育は世界各国に広がり、他国で盛んに実践されていった。

アメリカには日本よりも早く、1850年代にドイツから幼稚園教育が移入された。これはドイツ移民によるもので、当初はドイツ移民が居住する地域でドイツ人の子どもを教育するために行われたのが始まりである。これがアメリカ人の間にも広がり、アメリカ社会全土に普及していった。ここではフレーベル主義の幼児教育が席卷していた。

日本では1876年に、東京女子師範学校（後に東京女子高等師範学校、お茶の水女子大学）に付属幼稚園が開設されたのが幼稚園の始まりである。ここでもフレーベル主義の幼稚園教育がなされた。1896年にはフレーベル会（後の幼稚園協会）が付属幼稚園内に設立された。この付属幼稚園から幼稚園が普及し、1890年までには国立1、公立52、私立14もの幼稚園が次々に設立されるまでになっていた。その後1926年に「幼稚園令」が公布されて、幼稚園は制度として独立した教育機関として位置付けられることとなった。

J.デューイ（J.Dewey）は、シカゴ大学付属小学校いわゆるデューイ学校を設立し、そこで学齢児童のみならず幼児教育も実践した。デューイの代表的著書『学校と社会』¹⁾には「フレーベルの教育原理」が収められている。

荘司雅子は、デューイについて「フレーベルが自国ドイツでなすべくしてなしえなかったものをアメリカにおいて実践化した一人の偉大なフレーベルの使徒である」²⁾と評価している。また、平野

良明は、デューイの幼児教育はフレーベルの批判的継承であると捉えている³⁾。

倉橋惣三は1917年に東京女子師範学校教授を拝命し、兼務で付属幼稚園主事を命じられた。5年後の1922年には文部省から欧米に在外研究員として派遣され、ドイツではフレーベルの遺跡巡礼を行っている。また、アメリカではデューイが「新教育」を興したシカゴ大学、コロンビア大学の付属幼稚園を視察している。帰国後再び付属幼稚園の主事となり日本の幼稚園教育に携わった。倉橋は、1939年には岩波書店より『フレーベル』⁴⁾を出版したり、フレーベル会の機関誌『婦人と子ども』の編集を行ったりもした。こうして、フレーベルが幼児教育の祖といわれるように日本における幼児教育の父、あるいは日本のフレーベルともよばれている。

デューイと倉橋の幼児教育については、韓在熙の研究がある⁵⁾。韓は、日本における幼児教育カリキュラムの「経験主義」「活動主義」の視座には倉橋のデューイ理解が一因としてあるとした上で、倉橋のデューイ評価を検討して両者の同質面として子どもの生活重視と自然性重視をあげ、異質面としてはデューイの社会的概念の目的的活動、倉橋の個人的概念の自発的活動を抽出している。

1 経歴

(1) デューイの経歴

デューイの生涯については、田浦武雄が詳しく紹介している⁶⁾。ここでは主に田浦にしたがってデューイの経歴を概観する。

デューイは、食料品店を営むのんき者の父(48歳)と強い気質で子どもたちに厳格な母(28歳)の間に男ばかり4人兄弟の三男として、1859年にアメリカの東北部のバーモント州で生まれた。南北戦争で父は食料品店を手放し入隊し、戦争後は煙草販売店を経営した。

デューイは1867年小学校課程に入学した。当時のバーリントンの公教育は質が悪く教師の能力も低く、伝統的な教科はデューイにとって退屈なものであった。しかしデューイはよく勉強したので早く進級し小学校の課程を修了した⁷⁾。

その後、ハイスクール、大学へと進学する。1875年に地元のバーモント大学に進学したデューイは、当時話題となっていた進化論に興味をもった。最終学年では哲学の研究をするように導かれた。卒業前には、A.コント(A.Comte)の実証主義や宗教観などに関する論文に興味をもち社会的諸条件と科学的・哲学的思想の発展について学んだとされている⁸⁾。20歳でバーモント大学を卒業したデューイはハイスクール、小学校の教師として3年間務めた後にジョンズ・ホプキンス大学の大学院で学び、1884年からミシガン大学の講師として研究者の道を歩みだした。

1888年にはミネソタ大学に哲学教授として招かれ、ここでは文理・芸術学部に属した。しかし、翌1889年には、ミシガン大学にもどり哲学科の主任教授を拝命した。そこでG.H.ミード(G.H.Mead)⁹⁾をスタッフとして迎えた。その後1894年に、創立4年目のシカゴ大学に赴任した。それは哲学と心理学、教育学を合わせた複合学科の創設に心が魅かれたからだといわれる¹⁰⁾。ここでデューイは新教育の実

験的実践の場でもあるシカゴ大学附属小学校を設立したのである。これはデューイが36歳の時であった。ここでの実践報告の講演を出版したものが『学校と社会』である。

1899年にはアメリカ心理学会の会長を務め、1905年にコロンビア大学に移る。さらにアメリカ哲学協会会長も務めた。1919年には日本を訪問し東京帝国大学で講義をして、その後中国に1921年まで滞在した。1952年、92歳7か月で逝去するまで、非常に多くの著作を著している。

（2）倉橋惣三の経歴

倉橋は、1882年静岡市に生まれた。坂元彦太郎によれば倉橋家は徳川の旗本であって、父は静岡県芝富村の村長に二十歳でなり、その後裁判所判事を務めた後に弁護士を開業したという人であり、この人の人柄には甘いところがあったという¹¹⁾。

倉橋の伝記らしい伝記は見当たらない。しかし、倉橋が1954年に著した『子供讃歌』¹²⁾は倉橋の自伝と見てよいだろう。『子供讃歌』は倉橋が一高、東京帝国大学大学在学中にお茶の水幼稚園によく遊びに行っていたことから始まる。倉橋は東京帝国大学哲学科で心理学を専攻し、元良勇次郎¹³⁾の下で児童心理学の研究をした。

この頃の倉橋は教育学を学んでいたわけでもないが、何らかのきっかけがあって、ペスタロッチ伝に接して「ペスタロッチに酔える人」¹⁴⁾すなわちペスタロッチ伝のとりことなっていた。しかし、こうも書いている。「最初に読んだ教育者伝がフレーベルであったら、これから長くつづくであろう物語の書き出しとして、一層構成的妙が得られたかもしれない」¹⁵⁾「後の彼（倉橋）は、フレーベルの研究者でもあり礼讃者を以て自らを任ずるようにもなった」（かっこ内は筆者）¹⁶⁾と。倉橋はペスタロッチよりもフレーベルに魅力を感じていくのである。

倉橋は、お茶の水幼稚園だけに通っていたのではない。当時のスラムにあった二葉保育園、そして障害児の学校、現在でいうならば特別支援学校も訪問して子どもたちと触れ合っていた。こうして過ごした時は、倉橋に言わせれば「子ども遍歴時代」¹⁷⁾であり、この経験を通して「各々の子どもこそ、その子どもだという具体的児童観」¹⁸⁾を持ち得たのである。

東京帝国大学を卒業し大学院で児童心理学の研究をしたのち、1910年に東京女子師範学校の講師となった。このころから日本幼稚園協会の機関誌「幼児教育」の編集にもあたってきた。1916年には東京女子高等師範学校の教授に就任し、併せて付属幼稚園の主事も務めることになったが、2年後の1918年には文部省より在学研究員として海外に派遣された。まさにデューイの新教育による幼稚園が新興している時であり、倉橋は「ことにアメリカではデューイ流の新幼稚園が新興していた時だったし、イギリスでは教育の新政策と共に保育学校が新興していた時だから、この二つは彼（倉橋）の新保育の調査の主な目標として心構えされた」（かっこ内は筆者）¹⁹⁾と外遊への期待を書いている。

外遊中にアメリカではコロンビア大学付属幼稚園をはじめアメリカ各地の「新保育」幼稚園を訪ねた。コロンビア大学ではキルパトリックの講義に参加し、講義後にキルパトリックともよく話をして

いた。イギリスでは、マクラミン保育学校を訪問し、そこでは保育学校と幼稚園の差別を考えていないことを目の当りにした。同様にドイツでベスタロッツ・フレーベル・ハウスでも幼稚園と保育所の観念的区分にとらわれていないところを見てきている。このドイツでのベスタロッツ遺跡巡礼、フレーベルの遺跡巡礼については、彼の著書『子供讃歌』『フレーベル』で詳しく紹介されている。

帰国後、東京女子高等師範学校付属幼稚園主事に復帰し、『幼稚園雑草』『幼稚園真諦』『子供讃歌』『育ての心』『フレーベル』をはじめとする多数の著作を残し、1955年行年72歳で永眠した。

2 デューイのフレーベル理解と幼稚園教育

次にあげる3点が「フレーベルの教育哲学を間違いなく表しているとするれば、当シカゴ大学附属小学校は、フレーベルの教育哲学の説明者であるとみなされて然るべきである」^[20]と、シカゴ大学付属小学校がフレーベルの原理を実践していることをデューイは述べている。

第一に、学校の仕事は子どもたちが共同で相互扶助して生活できるような相互依存の意識を育成し、それを実行させることだとして、学校の機能を社会的観点からとらえる。

そもそもデューイは、教育の改革は当時の社会が農業化社会から工業化社会へ移行しつつあることに応えるものでなければならぬと考えていた。その教育的背後には家庭及び近隣集団制度があるということを重要視して、家庭が教育の中心をなしていた時代に言及する^[21]。家庭では家族の成員一人ひとりが自分の役割を誠実に果たし、そこには共同して相互扶助する生活があって、相互依存の意識が育成されていたのだ。しかし、工業化された当時の社会では、産業の集中化および分業化が進み家庭や近隣社会でのこうした仕事がなくなってしまった。そこで、デューイはそれまで家庭で大切なこととして教育されてきたことが学校において教育されなければならぬと考える。

第二は、子どもの本能的・衝動的な態度及び活動を重要視すること、つまり子どもの内から生じる活動に基礎をおいたことである。これは児童中心主義の観点からとらえたものということができよう。デューイは、それまでの教育の中心は子どもの外部にある、つまり「子ども自身の直接の本能と活動以外のところにある」^[22]という。そうではなくて、子どもが中心となるべきだと主張した。子どもの外部からの強制や単なる知識の注入ではなく子どもの自発的な活動が大切であり、かつ本能的・衝動的な活動が重要なのである。「子どもは特有の能力を持っているのである。この事実を無視すると、子どもの成長が依存している諸器官の発育を妨げたり、それをねじ曲げたりする」^[23]ことになるということから「本人自身の認識を犠牲にして自動的な熟練を達成するような練習やその他の方策」^[24]を厳しく批判する。「すべての教育活動の第一の根源は、子どもの本能的・衝動的な態度および活動にある」^[25]という。

最後は、個人的な性質や傾向を利用して、一段と大きな社会、つまり実際の社会での行為、仕事を再現することであり、これらの仕事をとおして価値ある知識を獲得するということである。この仕事、デューイが言うところのオキュペーション(occupation)である。これは、第1、第2の視点の両

者を統合して広く適用しようとする観点からとらえているといえる。デューイは「学校はこれまで生活の日常的な条件や動機からはなはだしく切り離され、孤立させられているので、(中略)、経験を、この世の中で獲得するのが最も困難な場所になってしまっている」²⁶⁾と学校が現実の社会から乖離していることに対して危機感を表し、学校が生活と密接に結び付き「小型の共同社会、胎芽的な社会」²⁷⁾となるべきだと考えていた。そうしたことから三番目に「いちだんと大きな成熟した社会での典型的な行為および仕事を、子どもの段階で再現すること」つまりオキュペーションが掲げられている。フレーベルの教育哲学として掲げられている3点は、これまでのも報告されているようにデューイがフレーベルにおける幼児教育の原理をシカゴ大学附属小学校の実践に取り入れてフレーベルを継承していると考えられるが、これらはデューイの教育哲学とフレーベルのそれが一致するものだったということと言うまでもない。

当時のアメリカにおける幼稚園での教育は、いわゆるフレーベル主義を実践していたのだが、デューイはフレーベル主義の幼児教育を墨守しようとはしない。その当時の実践はフレーベルの真意を解せず表面的に模倣するだけのものであり、デューイはそのようなフレーベル主義から解放しようとしたのである。つまり、フレーベル主義による幼児教育が、フレーベルが唱え実践しようとしてきた幼児教育にとどまることなくさらに発展すること、これがフレーベルの願いであり真意なのだとデューイは理解する。

デューイのめざすものは壁のない自由な相互作用なのである。そのためには、フレーベル主義の幼稚園教育に修正を加えなければならないとして、遊戯、教材、方法について言及している。デューイは、フレーベル主義の教師が自らの教育を見直す視点として、遊戯について2点指摘する²⁸⁾。一つは、遊戯を子どもの内面から発現し子どもの諸能力を成熟させるものにするもので、もう一つは、その遊戯が子どもを一段と高い意識と活動へ導くものでなければならない、ということである。これらはフレーベル主義を盲目的に実践する幼稚園の教師達への警鐘であり、また、遊戯は内なる欲求や衝動から発する行為であるべきだという児童中心主義の主張でもある。その活動をとおしてより高い水準へ彼らを導くような衝動を生じさせるべきだ、というデューイの主張でもある。

デューイもフレーベルと同様に、遊戯が幼児教育において重要な働きをすると考える。それは、遊戯が子どもの内面からの欲求や衝動を根源とする活動であり、人間の総合的な活動であるからにはかならない。遊戯というものは、幼児の発達において最高の段階でと考えていた。デューイは遊戯について「遊戯は子どもが外面的におこなう(the child externally does) 事柄と同一のものであると考えてはならない」²⁹⁾という。ここでいう「外面的におこなう事柄」とは、外から観察できる子どもたちの活動のことでも、自らを外部に表現する活動ということでもない。そうではなくて、外から与えられる事柄、つまり大人が準備して与えるような遊戯のことであって、そのようなものであってはならないという。遊戯は子どもの心理的な態度であって、あらかじめ大人によって決められた順序にしたがって活動することでもない。だから、フレーベル主義の教員が墨守している恩物から解放され

なければならないと考える。

デューイは、子どもたちは年長者たちの仕事を模倣した遊びをするのであり、その遊びをするように暗示するような玩具をあたえられなくてもその遊びをするのである。遊戯の楽しみは、子どもたちが必要なものを見つけたり、作ったりすることから生まれる、とデューイは考える。子どもたちは遊戯を通して、社会の仕事や社会を維持するために必要とされることに気付くようになる。そうした点でも遊戯は重要な教育的価値を持つものである。

デューイは、「ここでは、4歳の子どもたちに対するのと同様な信念と誠実さをもって、この原理を12歳の子どもたちに適用し、この原理に従って教育を実践していこうという試みがなされている」³⁰⁾という。このことは、それまでに行われていた学校教育の考え方や方法をこれからの幼児教育に取り入れて両者を連続させようとしたのではなく、児童中心という幼児教育の方法で、特に12歳までの子どもの教育を展開しようとしていたと考えてよいだろう。デューイにとっては、このような幼稚園における教育のあるべき姿が学校教育の基本なのだ。

デューイは、「学校教育における浪費(waste) が組織上の問題から生じるのであり、それは事物が孤立していることに起因する」³¹⁾と考える。その時に、学校が社会から孤立していることを考えるのであるが、それとともに各学校種間の孤立をも問題とする。教育目的や方法に一貫性が欠如していて幼稚園と小学校には連続性がなく、それぞれが孤立していることを問題視したのである。

デューイは、フレーベルが幼稚園を創設した過程を「育児室とシェリングの哲学とが合体してできたものであった」³²⁾と述べ、哲学的要素が幼稚園と他の学校制度との間の障害物になっていると指摘する。なぜなら、教育に生氣をもたす力は子どもの実際的な生活の研究、すなわち育児室から生まれるものであって、象徴的な哲学から生じるものではないからだという。デューイは、現実に生活する子どもたちに目を向け、それを基にしなければならないと考える。

3 倉橋惣三のフレーベル理解と幼稚園教育

倉橋は著書『フレーベル』において、フレーベルは「馬鹿爺さん」の異名でよばれていた教育的天才であると称賛する。その称賛は、フレーベルが子どもと真剣に遊ぶ姿、児童を敬重する態度に対するものであり、そしてフレーベルの教育愛に対するものなのであろう。

倉橋は、フレーベルをけっして哲学的には理解しない。理論的な理解を避けているようにさえみえる。フレーベルの宇宙観的教育説が立てられるに至った源泉は自然哲学への傾倒と共鳴にあるものと考えられるが、自然哲学観なくしてフレーベルの教育が生まれなかったというほどの根源的なものではなかったと倉橋は考える³³⁾。さらに、フレーベルの『人間教育』についても理論の書ではなく、単にフレーベルの人生観と児童観、教育観を感想と瞑想との錯綜する記述であるにとらえ、哲学的思想よりもフレーベルの児童愛と親切なる教育心を読み取っている³⁴⁾。そして、たとえ哲学的思想とフレーベルの著作を結び付けたとしても大して役に立つものでないともいう。

フレーベルは『人間教育』で、すべてのものの中に、永遠の法則が宿り、かつ支配しており生命の中にも同様に統一者が存在しているとする。この統一者がすなわち神なのである。ここから神性の具所有者としての児童が導き出される。神は統一であり調和である。したがって教育の目的は調和的本質のものである。このように、フレーベルの児童観はこの神性性をもって特徴づけられる。そこで、倉橋は、宗教的神秘性や非現代性を批判するのだが、このことよりもここから生まれてくる児童観の深味に理解を集中すべきだという³⁵⁾。それが児童の自発発達性と発達段階観なのである。

神が存在し子どもが神の創造物ならば、子どもは完全体であるはずである。しかし、はじめから完全体ではなく、発達していくものであって発達によって完全になっていく。子どもには自然に自らを自ら発達させる力が備わっている。この自発発達性があることは明らかなことで、誰もが認識していることであって、児童観の通念としては珍しいことではない。しかし、実際の幼児教育での大人の態度はそうではなく、現実には児童の自発発達性に基づく教育は少ないと倉橋は指摘する。子どもを大人が思うように扱おうとするならば、それは子どもに備わっている自発発達性を無視しているのである。

そして、今日のような発達段階説が自発発達説と並んで存在しなかった時代に、フレーベルが発達の段階を尊重したことが先駆的であり、フレーベルが授乳期、幼児期、少年期と分けて心理的に解釈し教育的に述べている中で、それぞれの段階の生活に対するフレーベルの繊細なる観察と理解には、誠に驚嘆するものがあるという。このように理論的推想よりも生活を直観することから導き出される段階的特質の認識を重要視しているフレーベルの児童観が尊いのだ。

倉橋は、こうした児童観の下になされたフレーベルの生き生きとした幼児教育の精神に敬服しながらも全面的に同意するものではなく、フレーベルの象徴主義、恩物については鋭く批判するのである。そして、フレーベル主義の幼稚園教育を批判する。それは「フレーベルの精神を忘れて、その方法の末のみを伝統化」³⁶⁾した幼稚園教育だからなのだ。「幼児を教育すると称して、幼児を先ず生活させることをしない幼稚園」³⁷⁾に強く反対する。倉橋の目指す幼稚園教育は、幼児の生活そのものなのである。したがって幼稚園は子どもの生活の場で、生活に適した場なければならない。単に教育目的の場であってはならないのである。

したがって、倉橋は幼稚園という概念を作っておいて、そこに子どもたちを入れてくるということに警鐘をならす。幼稚園には、誰もが素晴らしいと考える教育の目的があり、それに従って教育をするときには、子どもの能力に不相応な教育をすることになるのだと考える。倉橋が「生活を生活で生活へ」³⁸⁾という言葉は「子どもが真にそのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、それへ幼稚園を順応させていく」³⁹⁾ことなのだ。最も望ましいことは、子どもたちが自然に生活している中で、「いつの間にか教育する」ということなのだろう。そこから子どもたちの生活を充実させる充実指導に発展する。指導という場合、教師の活動に重きが置かれることになるが、それが押付けにならないように、その子どもに応じた指導でなければならないことを強調する。それは、

子どもの内部に即しての内部指導であるから子どもの中に入っていなければならないということなのだ。倉橋は「こっちの標準へ引き寄せる教導というところに進んでいってしまったら、保育法の真諦をまるで踏みにじるものです」⁴⁰⁾という。

次に倉橋は誘導保育を提唱するのだ。誘導は指導ではない。誘導を教師が意図する方向に単に誘導することだと考えると子どもの内面から生じる生活を見失ってしまうことになる。子どもたちの生活は断片的で刹那的である。したがって、それらを系統づけることが必要になる。この系統づけが倉橋いう誘導なのだ。系統づけによって「生活の真の面白味」⁴¹⁾が加わってくるのである。

倉橋の幼稚園教育は、どこまでも一貫して子どもの生活を重視した教育であり、その延長上に誘導保育がある。

終わりに

デューイも倉橋もフレーベルから影響を受け、それを批判的に継承している。それは、子どもの内面に目を向け、子ども自身が成長しようとするその力を最大限に生かすことであり、大人が外から何らかの力を加えて思うように育てることではない。重要なことは、遊戯にせよ作業にせよ、子どもの内面から生じるものを大切にすることであり、子どもを中心に置くことなのである。

また、両者ともにフレーベルの形而上学的側面には賛同しない。フレーベル主義に立って幼稚園教育を展開していた教師たちの恩物主義・象徴主義を批判し、フレーベルの最も特徴的なところであるといわれる形而上学的側面を排除したのである。すなわち、非科学性、非合理性を含むフレーベルの超自然観を排斥したのであり、デューイも倉橋も人間生活に根を持つ理想的教育を求めたのである。

デューイが児童中心主義、経験主義、道具主義の見地から幼児教育をとらえて学校教育を改善しようとしたことは、これまで言われてきたように明らかである。デューイの考えの根底にあるものは、フレーベルが「人間の生命の革命は外からではなくて、内からでなければならない」⁴²⁾と考えたことと、子どもの内からの欲求や衝動に活動の根源があるという点で大きく異なるものではないのだろう。フレーベルもいわば児童を中心に据えた幼児教育をしており、デューイはこれを継承したということもできよう。しかし、これまで見てきたようにフレーベルの児童賛美主義とは異なるものだ。

デューイは、教師の指導については「模倣」と「暗示」についての議論はしているものの子どもの要求や自発性を重視し、それに依拠した教育を展開しようとしたことによって、教師の指導性の積極的な評価は不足している感があることは否めない。

その点で倉橋の幼稚園教育は、子どもの生活を中心に据えながらも充実指導から誘導保育、さらには教導にまで発展し、教師のいわゆる指導性をも重視しているということができよう。その指導には教育の目的あるいは目標が歴然と存在しているといえる。子どもの自主性・自発性を尊重するからといって教師が何もしないことはあり得ない。子どもの自主性・自発性と教師の指導性の比重が問題となろう。子どもは自らのやりたいことをやりたいようにしていると感じながらも、大人である教師が

設定する目的・目標に導かれるということなのである。このことについてデューイは放任ではないといい、倉橋は「いつの間にか教育」するという。

倉橋が『幼稚園真諦』復刻の序で「理論的の組み立てや、基礎づけではなくして、実際を実際に即して」幼稚園教育を考えるというように、倉橋の思考は常に、実際の生活、行動を基にして理解し、実際の幼児教育に役立つものを求めるのである。その意味において倉橋の思想もまたプラグマティズムなのだ。ただ、韓がデューイの幼児教育は社会的概念の目的的活動で倉橋の幼児教育は個人的概念の自発的活動⁴³⁾であるというように、デューイが社会の中での生活を重視しているのに対して倉橋は個人の生活に目を向けているといえることができるだろう。

倉橋は少なくとも『幼稚園真諦』において小学校との連続についてつまり学校種間の連続について目立った言及はしていないが、デューイは幼稚園から小学校へ連続した教育の展開が必要であると考えていた。

「教育は思想ではない。ましてや理論ではない。実際教育者が、それからその教育を生み出している教育的性格は、その教育の実際においてしか見ることはできない」⁴⁴⁾という倉橋の方法・態度は現在においても重要なことである。

限られた紙幅の中で両者の幼児教育を十分に論ずることは到底可能なことではなかったが、これからの教育が「何を学ぶか」という視点から「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」という視点で見直され、「主体的・対話的で深い学び」をめざしたアクティブラーニングへ教育を活性化しようとするときに、デューイ、倉橋の考えと実践を再検討することの意義は大きいだろう。

注

- 1) J. Dewey: THE SCHOOL AND SOCIETY, The University of Chicago Press, 1899=Dover, 2001. (市村尚久: 学校と社会 子どもとカリキュラム、講談社学術文庫(東京)、1998)
- 2) 荘司雅子:デューイとフレーベル、23, 日本デューイ学会紀要、1982, 88.
- 3) 平野良明:「資料1」、山本和美編著:保育方法論、樹村房(東京)、167-176, 2002.
- 4) 倉橋惣三:フレーベル、倉橋惣三選集第一巻、297-404、フレーベル館(東京)、1965(初出1939).
- 5) 韓在熙:倉橋惣三とデューイの幼児教育カリキュラム論の比較研究、エデュケア、19, 61-67, 1998.
- 6) 田浦武雄:デューイとその時代、玉川大学出版部(東京)、1984.
- 7) 魚津郁夫:デューイ、平凡社(東京)、1978.
- 8) 田浦武雄:前掲
- 9) G.H.ミードはアメリカの哲学者・社会心理学者で、シンボリック相互作用論の父ともいわれる。デューイがシカゴ大学附属小学校実践報告の講演を『学校と社会』として出版にかなうように手直したのがミード夫妻である。
- 10) 田浦武雄:前掲
- 11) 坂元彦太郎:倉橋惣三 その人と思想、フレーベル館(東京)、1976.
- 12) 倉橋惣三:子供讃歌、フレーベル館(東京)、1976(初出1954).

- 13) 元良勇次郎はアメリカに留学し、スタンレー・ホールに学び帰国後東京帝国大学で心理学教授となった。理論と事実、学問と実際の間に画線を引き、理論は理論、実際は実際と区別する理論の人であった。元良について倉橋は『子供讃歌』の中で、「先生は、御自分の流儀で他を律することの、毛すじ程もない方で、彼（倉橋のこと）にも、未熟のままにその流儀を伸ばさせて下さった」（かっこ内は筆者）と元良を敬慕し、これが大きな幸이었다と書いている。
- 14) 倉橋惣三:前掲、14,1976（初出1954）。
- 15) 倉橋惣三:前掲、14,1976（初出1954）。
- 16) 倉橋惣三:前掲、20,1976（初出1954）。
- 17) 倉橋惣三:前掲、33,1976（初出1954）。
- 18) 倉橋惣三:前掲、33,1976（初出1954）。
- 19) 倉橋惣三:前掲、84,1976（初出1954）。
- 20) J. Dewey:Ibid., 72-73,1899=2001.（訳185-186）。
- 21) J. Dewey:Ibid., 7-8,1899=2001.（訳66-68）。
- 22) J. Dewey:Ibid., 23,1899=2001.（訳66-68）。
- 23) J. Dewey: Democracy and Education, An Introduction to the Philosophy of education , 1916=Martino, 59,2011. (松野安男訳:民主主義と教育 上下2巻、87,岩波文庫（東京）、1975)
- 24) J. Dewey:Ibid., 87,1916=2011.（訳88）。
- 25) J. Dewey:Ibid., 72,1899=2001.（訳185）。
- 26) J. Dewey:Ibid., 72,1899=2001.（訳185）。
- 27) J. Dewey:Ibid., 1899
- 28) J. Dewey:Ibid., 74-75,1899=2001.（訳188-189）
- 29) J. Dewey:Ibid., 73,1899=2001.（訳186）
- 30) J. Dewey:Ibid., 1899=2001.
- 31) J. Dewey:Ibid., 40-42,1899=2001.（訳125-128）。
- 32) J. Dewey:Ibid., 42,1899=2001.（訳128）。
- 33) 倉橋惣三:前掲、324-325, 1965（初出1939）。
- 34) 倉橋惣三:前掲、333, 1965（初出1939）。
- 35) 倉橋惣三:前掲、336, 1965（初出1939）。
- 36) 倉橋惣三:幼稚園真諦、フレーベル館（東京）、7, 1976（初出1934）。
- 37) 倉橋惣三:前掲、7,1976（初出1934）。
- 38) 倉橋惣三:前掲、23,1976（初出1934）。
- 39) 倉橋惣三:前掲、23,1976（初出1934）。
- 40) 倉橋惣三:前掲、40,1976（初出1934）。
- 41) 倉橋惣三:前掲、44,1976（初出1934）。
- 42) 荳司雅子:フレーベルの生涯と思想、玉川大学出版部（東京）、39, 1975.
- 43) 韓在熙:前掲
- 44) 倉橋惣三:前掲、306, 1965（初出1939）